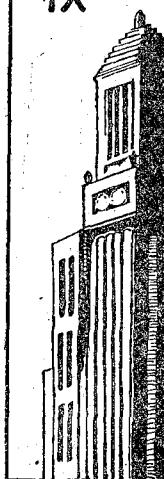


路政春秋



国道もものかは

近年稀有の豪雨と稱せられた自然力は神戸其の他の地方に甚大な慘害を與へた、思ひも寄らざる大量の雨水には平素の工事は不可抗である。伊藤事務官は「がくして自然との鬭争は終つた、しかし人間側の敗北の中に終つた、殘るはたゞ其の跡仕末であり、其の被害の復舊である」と實に然りである。山岳を征服したと登山者は叫ぶ、堤防の堅固なる工事が終ると河水を征服したと當局者は唱へる、ドライブ・ウエーが

如何であるか、神戸地方丈けでも土木復舊に二千五百萬圓を要すると聞く果して然るや否門外漢の知り得ざる所であるが山岳の修理河川道路橋梁の復舊修理は云ふも更ならず、民有に屬する家屋其の他の復舊經費は幾何であるか、自然力の破壊作用の害毒は實に驚くべきものである、妾りに征服すると揚言するを慎み自然を利用善用すと言はんかなである。

海波は躍る巨船の

足

大西洋上雄姿をかゞやかして偉容を誇るの征服と自稱したる處に入間の敗北に歸する出來事が生ずる、八力の征服能率果して

佛國の「ノルマンティイ」は世界一の大船と他共に許す所である。然るに之れに比して

注 本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻撃に渡らざる限奇想天外的の奇稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

熊野の道は昔の小栗街道

長汀曲浦の旅をつゞけられた紀州熊野

三山の巡禮道は和歌山市から紀南に通ずる小栗街道である、史蹟をうとむ熊野街道や舊新縣道の開通はともかく調査委員伊藤氏は親しく糸我崎、猪ヶ瀬崎、十丈崎、蓬坂

峰三越峠などの峻坂を上り下りして大昔の旅を偲びつゝ次の如き感想を述べられた』

『とくに感じましたことは熊野まで最短コ

ースによつて結ぶため近道を選んでゐる

ことです、現在の縣道は迂回しながら山

を越してゐますが小栗街道は山の麓から

一直線に頂上を極め谷へ下るといつた式

で、従つて風光明媚なところを通るため廻り道をするやうなとこがありません、

當今の觀光道路とは全然趣を異にしてゐ

ますので平凡な景色でも珍しかつたとみ

え大袈裟に賞め讀へ歌に詠まれて紀行文

と昔を今になすよしもがなか。

山路を征服する甲

斐草鞋

靴が下駄となり、下駄が草鞋となる時代

も長期戦の影響かと思ふにつけても草鞋の

原料がペルフとなるの日には草鞋は如何な

あるかなきかの珍 聞奇談

○河内地方誌からの西行夫人 西行法師が

終焉の地として傳へられて居る大阪府南河

内郡の弘川寺にある一尺九寸の黒衣に鼠色

の五條袈裟をかけた尼僧の像が河内地方誌

によりて西行夫人の像と知られた、夫人は

夫西行の跡を追ふて遁世し貞信尼と稱して

佛に仕へた、妻子恩愛の絆を斷ち切つてひ

たふるに自然の美と藝術と仕佛に精進した

さすらひの歌人西行法師のゆかりある此の

る原料によるべきか、茗荷の織維が強くて

鼻緒の蕊とも麻裏草履ともなる適質を具へ

て居ると云はるゝに至つた、むべなるかな

甲斐の智將武田信玄が使用した「甲斐草鞋」

は茗荷製であつて藁製草鞋の三倍の耐久力

があつたとの事である、甲州の山路を征服

した甲斐草鞋の原料を知りさすがは信玄で

あると今更ながら驚くの外はない。

澤家から小早川陰景の鎧と共に大塔宮の御

令旨が發見された、此御令旨は元弘三年五

月八日村上家の祖先備後因島城主幸賀批村

上義弘の戰功に對し賜はつたもので其文左

の通り「度々合戰捨身命致軍忠候、剣去

大塔二品親王令旨如此悉之以狀

元弘三年五月八日

左少將(華押)

終を慎しみ遠きを

追へは民の

徳厚に歸す